

会 議 結 果 報 告 書

令和 7 年 10 月 3 0 日

会議の名称	第 4 回 東地区まちづくり懇話会	
種別	☐ 附 属 機 関 ☒ 懇 話 会 等	
開催日時	令和 7 年 9 月 3 0 日（火）10 時 00 分 ～ 1 2 時 0 0 分	
開催場所	市役所別館 6 階 6 1 1 会議室	
出席者	別紙のとおり	
議題	・まちづくりの事例紹介 ・東地区まちづくり構想について	
公開の区分	☒ 公 開	
	☐ 部分公開	[理由]
傍聴者数	0 名	
審議結果 及び 主な意見等	別紙のとおり	
会議録の作成様式	☐ 詳 細 ☒ 要 約	
備考		

担当課	舞鶴市建設部都市計画課 TEL (0773)66-1048
-----	----------------------------------

第4回東地区まちづくり懇話会

1. 日時:令和7年9月30日(火)10:00~12:00

2. 場所:市役所別館6階 611会議室

3. 出席者:(委員)嶋田委員(オンライン)、川井委員、名取委員、芦田委員、福村委員、渡邊委員

(事務局)上羽次長、山下主幹、阿部係長、浪江

山本次長

4. 内容

第1部:まちづくり事例紹介(株ANCL 福島氏・宮本氏)

○ホテル・カフェ併設複合施設の計画

・東舞鶴駅の三条通と八島商店街の間にある旧履物と旗屋をリノベーションし、1階に地域住民も日常的に利用できる食堂、2階に1日1組限定のホテルを設ける。

・コンセプトは「舞鶴の暮らしと味をそっと纏う」とし、舞鶴の暮らしにふれる接点をつくり、まちと来訪者が繋がる体験価値を創出する。

・駅周辺の空洞化に対する空き店舗活用の成功事例を創出し、これを起点に複数店舗を点在させ、分散型商業施設(オープンモール)を目指す。

・舞鶴は特定エリアに一極集中しており、「ここも行きたいよね」という場所が街中に点在し、回遊するための拠点が不足している。

・短期的な経済効果に加え、中長期的にIターン・Uターンの若者移住を促進する。東地区はアップデートして活性化させやすいポテンシャルを持っている。

【意見交換】

・商店街担当として期待しており、滞在期間が年間3分の1でもある関係人口の創出は、実質的な定住に近い効果がある。

・舞鶴は、西の整備された城下町よりも、東の昭和の町の方が、多様な文化や時代背景があり、アップデートして活用しやすいと感じている。

・既存建物を生かしたプロジェクトは素晴らしい。若い人材が生活者として関わり、舞鶴に住民票を置いて活動してもらうことが、地域に信頼を得ていく上で最も効果がある。

・特定エリアに一極集中しているため、街中に目的地となる「ピン」を分散させ、回遊できる導線設計(分散型モール)が必要。これにより、観光客が街のいたるところでお金を落とすきっかけを作ることは効果的である。

第2部：議論の振り返りと東地区まちづくり構想案について

○共通の考え方

- ・人とまちの活性化は、志を持つ一人ひとりの活動から生まれる。
- ・高専の学生はまちにとって宝であり、彼らが活躍できる場をつくることが、まちを元気にする。
- ・学生の定着には、まちなかとの接点が必要であり、地域住民の新しいものを受け入れる意識が重要である。

○東地区まちづくり構想案

- ・子どもたちが夢を持てるまちを目指し、高専生に焦点を当てまちづくりの軸とする。
- ・東地区のまちづくりは、舞鶴高専、舞鶴市、産業界・金融機関、地域の4者が手を取り合い実現させていく必要がある。

【意見交換】

- ・高専を街全体に溶け込ませるという発想は良い。東の街全体を大学のキャンパスのようなイメージにすることと、拠点を作って回遊することが合致する。
→建物移転には多額の費用がかかるため、まずは一部の施設を設置するなど、移動を伴う不便さを作ることで回遊性を生み出す方法もある。
- ・高専でのアントレプレナーシップ教育に、金融機関としてファイナンスの部分で協力し、来年度に向けて地域企業の課題解決などを通じた連携を具体的に進めたい。
- ・構想案は抽象的であり、箱が整うのを待つのではなく、具体的なプロジェクトを進めることで、外部からの支援を得るための実績を作るべき。
- ・行政は、「大きなゴール」を設定し、そのプロジェクトを推進するディレクター（プロデューサー）を選任し、具体的な役割を各メンバーに振るなど、推進体制の明文化を行う役割を担うべき。
- ・夢を語るだけでなく、民間主導で学生と繋げ、学生が集まるマグネット施設をまずは1個作ってみるなど実現可能なことから始めるべき。
- ・行政が今やるべきことは、ゴール（目的）を設計すること。例えば「5年後に東の街を学生と観光客が集まるまちにする」という大きなゴールを設定し、そこから1年ごとのマイルストーン（ロードマップ）に落とし込むことが、動き出すために必要ではないか。